

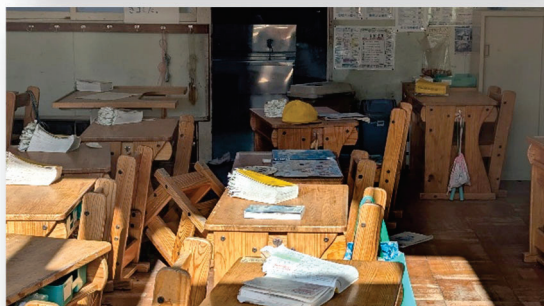


大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶

大熊未来塾の代表理事の木村紀夫さんは、2011年3月11日に大熊町を襲った津波で、父と妻、次女の汐凧（ゆうな）さんを亡くしました。当時の自宅（現在は中間貯蔵施設内）の4キロほど北にあった福島第一原発の事故で捜索を阻まれ、汐凧さんの遺骨発見まで5年9ヶ月を要しました。木村さんはこのような自分の経験を伝えることで、津波と原発事故の犠牲になる人を無くし、また誰かに犠牲を強いる社会を変えることを目指しています。

このプロジェクト学修では、大熊未来塾と木村さんの活動に福島大学生が参加することを通して、福島を経験を伝える意義について考え、次に自分たちも伝える側になる「語り継ぎ」の活動に取り組んでいます。

遺構で木村さんの語りを聴き、その保存を考える



これまで2024年5月26日（21名参加）、2025年1月19日（27名参加）、6月9日（26名参加）の3回、中間貯蔵施設内の遺構を巡りながら、木村紀夫さんの震災伝承の語りを福島大学生と教職員が聴かせてもらいました。

今年の1月19日と6月9日の回には熊町小の保存についてのディスカッションもあわせて行い、その後のアンケートでは、「熊町小学校は震災遺構として保存すべきだと思う」という設問に「大変強く思った」と回答者46名中37名（1～5点で回答の5点、80%）が回答し、8名が「強く思った」（4点、17%）と回答しています。また参加者からは「熊町小学校を見て、まるでタイムスリップしたかのように感じて、当時の状況がはっきりと目に浮かんだ。これは貴重なものだと思うので残していくべきだと思う」「苦しくなるほど震災を自分事として考えることができる」等の意見がありました。

自分たちも伝える側になる、語り継ぎ活動

2024年9月11日と2025年1月19日に、計4名の福島大学生が木村さんの語りの一部を、他大学や同じ大学の大学生に「語り継ぐ」活動にチャレンジしました。木村さんの代わりに語るのですが、その際、自分の感想や、他の震災遺構や語り部の話を聞いた体験等も交え、単に木村さんの語りのコピーではない、自分たちの言葉で伝えるように心がけました。

取り組んだ学生からは「当事者の語りでないと伝わらないことも多いが、自分が感じたことを整理して伝えていくことも大切だと考えようになった」「経験や記憶がなくても聞き手と同じ目線で話せるからこそ伝えられることや伝わりやすいことがあり、私たち学生が伝えることの意義について学ぶことができた」等の感想がありました。





熊町小学校校舎の保存を同校卒業生と考える



大熊町が中間貯蔵施設内の遺構の保存活用について検討する 2025 年度、その遺構を「語り継ぎ」活動の場としている協働プロジェクト学修「大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶」では、同校卒業生の遠藤瞭さんを福島大学にお招きし、熊町小学校舎の保存について、誰にとってどんな意義があるのかを考えるワークショップを、7 月 5 日（土）と 7 月 13 日（日）の 2 回、開催しました。

遠藤さんのお話—卒業生にとっての熊町小学校校舎の価値

ワークショップの最初に、遠藤さんから以下の内容についてお話いただきました。

- ・大熊町にあった図書館や商店街、文化センター等の「思い出の場所」の解体が進む状況
- ・熊町小 4 年生であった当時、東日本大震災に遭遇し、大熊町から転々と避難し、会津若松市に
- ・避難先に集まった同級生は約半数。2 年後大熊の中学校に進学したのはさらに半数
- ・2021 年 10 月の成人式は震災後初の大熊町での開催。福島大学が成人記念アルバムを作成
- ・避難先で通った学校は仮設校舎の場合もあり、熊町小の校舎は、自分が大熊町で育った証（あかし）になる貴重な建物
- ・復興とは「復興について考えなくなること」だと思うが、それは「もう思い出したくない」というネガティブな理由ではなく、今を楽しんで生きることができるというポジティブな理由によることが良い
- ・大熊町に思い出のあるものが何もなくなったというのは、禍根を残し、ネガティブな理由を増やす。思い出の場所である熊町小を残すことができたという経験は、ポジティブな理由になる

ワークショップ参加者が考えた熊町小校舎の価値

遠藤さんのお話の後、熊町小の価値等について考え、以下のような意見が出ました。まとめると、卒業生や大熊町民には「大熊町のコミュニティをつなぎ、継承する価値」、町外の人や未来の世代には「原発事故を感じ、同じことを繰り返さないよう継承する価値」が熊町小校舎にあると考えました。



- ・卒業生や大熊町民にとっては、事故前の町を思い出せる貴重な場
- ・大熊町民や町に関わりがあった人にとって、自分自身と町の繋がりを感じられる場
- ・震災当時を知らない人にとっては、かつてのことを想像したり、起こったことを考えたりする場
- ・未来の人にとっては、同じことを繰り返さない警鐘の場
- ・離れた・なくしたことで気づいた価値—当たり前が当たり前じゃないこと
- ・（熊町小にあるひとつひとつの物の）背後には一人一人の経験がある。残された日常の痕跡で、震災を知らない世代もそれを現実として捉えられる。記録だけでなく、記憶として伝えていくことができる。



協働プロジェクト学修参加者の声

「語り継ぎ」やワークショップの開催に取り組んできた、協働プロジェクト学修「大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶」参加者に、熊町小校舎への思いを声にしてもらいました。

熊町小学校は大熊町民の心の拠り所となるだけでなく、大熊町民でない人たちにとっては東日本大震災が発生したときの混乱の様子を知ることができる貴重な場だと思います。帰宅困難区域内の建物が次々と取り壊される中、震災前の大熊町には多くの人が生活していたこと、そして震災の混乱の様子を当時の状態がほとんどそのまま残っている教室を目にして学ぶことができる熊町小学校は、後世に大熊町のことを伝える上で重要な存在なのではないでしょうか。

行政政策学類 3 年

熊町小学校は、震災と原発事故の記憶を次世代に伝える唯一無二の存在です。建物をそのまま残すことによって、当時そこで営まれていた生活や避難の実態を実感でき、震災・復興を自分事として捉えることができるという価値があると私は考えています。熊町小学校は、町民だけではなく、外部の人や震災を経験していない世代など、様々な立場の方と共に震災・復興を考える貴重な場となるのではないのでしょうか。

経済経営学類 2 年

私は実際に見学し、お話を聞いて熊町小は時間が止まったような様子で残されていたため、地域の人たちにとって故郷の思い出の場所であり、特異な原発の被害というものを後世の人々に伝えていくことができる施設になると感じた。ここの存在は町民や福島県民だけでなく、すべての人々が知るべきであるほどの価値があると思う。

経済経営学類 2 年

関りのなかった小学校や子どもたち、その家族と住民の方々。学校が残されることで、私たちは繋がり、時間を飛び越えて一緒に考えることができる。復興により町の姿が大きく変わっている大熊町なればこそ、失われた日常の姿や思い出をふり返り、共有する場が必要なのではないのでしょうか。地震や津波で破壊された校舎ではない熊町小は他に類のない場になると思います。

教員

熊町小では、原子力災害が無人の荒野で起きたのではなく、子どもたちが日常生活を営んでいた学校を、突如として襲ったことが一目で把握できます。そして熊町小が、そのままの場所に、そのままの姿で「ある」ことが、人の心を強く動かしします。また卒業生と大熊町民の中には、校舎の解体を、再びふるさとを奪われるように感じる人もいます。熊小校舎の解体は、そのような町民と未来世代への暴力になりかねません。熊小校舎を解体せず残し、保存することを強く望みます。

福島大学地域未来デザインセンター教員 藤室玲治